



Title	日本統治下の台湾における大衆芸能の興行：タカマチとしての博覧会
Author(s)	藺田, 郁
Citation	JSPS科研費「日本統治下台湾における歌舞伎・浄瑠璃を中心とする諸芸能興行研究」23K00117 研究成果報告書. 2026, p. 37-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/104308">https://doi.org/10.18910/104308</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 2 日本統治下の台湾における大衆芸能の興行

### ―タカマチとしての博覧会―

蘭田 郁

#### 一、はじめに

近代日本において大衆向けの語り芸——たとえば、浪花節（浪曲）や、説経祭文、説経源氏節（源氏節）など——が、芝居や踊りと結びついたことは、その芸能の諸形態に注目することと同時に、興行的側面にも目を向けることに繋がる、という点で重要である。

これまで芸能の近代的展開を語る際にしばしば関心が寄せられたのは、マスメディアとの関連においてであった。たとえば浪花節においては、レコードやラジオといった媒体によって拡がりを見せた点が強調される。しかし一方で、これらメディアによる拡散と並行して、寄席や芝居小屋といった実演の場は、依然として重要な役割を果たし続けていた。このような現場からの視点もまた、近代大衆芸能の全体像を捉え直す上で不可欠である。レコードやラジオといった媒体に乗りにくく、踊りや芝居と語り芸が融合して舞台化する形で展開した芸能には、先に述べた浪花節における節劇、あるいはそれ以前の時代でいえば、源氏節における女芝居（源氏節女芝居）などがある。これらがどのような動きの中で拡がってきたのかを検討することで、近代日本の大衆芸能全体の動向の中に新たな視点が浮かび上がってくる。そのうちの重要な論点の一つが、地域的広がりにおける芸能興行の問題である。

たとえば、上記以外での例として、以下で扱う活動人形もそのうちの一つに挙げられる。活動人形は東北地方を拠点に、東京や大阪といった大都市を含む全国へと野外で行われる仮設興行を拡げていった。このように地域発の芸能が全国規模で展開されていくプロセスは、従来とは異なる見方から大衆芸能の領域を理解する手掛かりとなる。特に興行の拡張という点でいえば次の二つが焦点となるだろう。第一に、芸能興行の地域的な活動範囲が従来よりも大きく拡大したこと、第二に、興行の形態自体が拡張・変容し、寄席や演芸場といった定型的な興行場所以外に、博覧会のような空間が新たな舞台として浮上してくるという点である。とりわけ、後に取り上げる、外地における博覧会で行われた興行は、上記二点を含む事象であり、また単なる娯楽を超えた、近代特有の政治的意味合いを伴う複雑な状況を帯びた事象としても注目できる。

当時、浪花節の隆盛を支えた主たる興行場所は寄席や演芸場であった。しかし、それらとは異なり、より不特定多数の観客（大衆）を対象とした興行形態として重要な役割を果たしたのが、「タカマチ（高町）」「タカモノ（高物）」と呼ばれる興行である（以下、「タカマチ」に統一して記述する）。タカマチとは、神社や寺院の境内を一時的に利用し、仮設の芝居小屋を建てて野外で芸能を上演する形式の興行である。その性質上、見世物興行、あるいは単に「見世物」とも呼ばれる。こうした形式は前近代から存在していたが、近代化と都市化の進行に伴い、規模が拡大し、都市部で頻繁に実施されるようになった。

「見世物」は東京では靖国神社や明治神宮の祭祀に合わせて開催され、大阪では千日前などでも仮設興行が行われ、また、大都市のみならず地方都市でも見られた。たとえば、昭和初期の岩手県盛岡市・盛岡八幡宮の大祭の様子が地元の新報に記載されており、その記事では、多様な見世物が披露されていたことが確認できる。

子供ばかりでない大人も心待ちにまった県社八幡宮の祭典だ。肴町、生姜町、八幡町通りは祭典第一日の十四日朝来から実におびただしい雑踏振りである（中略）八幡町坂上を登りつめるとモウお祭り気分がざわついて来る様だ。大鳥居をくぐると左側には拳闘、曲馬団などがしめっぽいクラリネットやラッパ太鼓などで客引きに余念なく、右側には水中美人、電気応用操り人形、その他教育資料何々といった出鱈目な毒々しい色彩の看板で客の目を奪ってしまふ。」（『岩手日報』、一九二九年九月十五日付け、第二面）

こうしたタカマチ興行は、全国各地に出現することで、広域の興行ネットワークを形成していく。タカマチ興行が近代において一層の隆盛を見せた背景には、都市と、物と人の横断的な交流を可能にした社会的な構造の變化がある。それらを土台にして、下記に述べるような地方を拠点とした巡業興行を主体とする芸能集団が数多く現れ、そうした存在が主体となりうるタカマチ興行の拡張は、やがて外地での興行や、博覧会という新たな場への展開へと繋がっていく。以下では、その具体的事例として、台湾におけるタカマチ興行と博覧会の実態について概説していく。

## 二、台湾のタカマチ興行

まずは、台湾のタカマチ興行の例として、台湾に建てられた日本の神社で行われた行事の余興・見世物として登場した芸能について見ていく。台湾の神社は、日本の統治機能として大きな役割を担っており、その中で催される行事も、当然日本のやり方に則っていた。なかでも台湾神社は、明治三四年（一九〇一）に台北市に建てられた神社で、毎年一〇月末に大きな祭りが行われ、新聞にもその様子が大きく取り上げられている。以下、台湾

神社を事例にした調査研究報告「台湾日日新報 台湾神社余興の関連記事」（劉 二〇一八）から、戦前の台湾神社の祭りにおいて具体的にどのような芸能が上演されていたのかをみてみよう。報告書では、多くの芸能記事が取り上げられているが、ここでは大衆芸能が言及された部分のみをいくつか抜き出すと、たとえば大正七年（一九一八）一〇月二七日は「雷雀一座の軽口、喜劇、奇術、海上軒浪丸の浪花節」、大正九年（一九二〇）一〇月二十二日「落語、手踊り、名古屋漫才、手品、軽口、二輪加」、大正一四年（一九二五）一〇月二五日「安来節、浪花節の素人演芸」と、様々な大衆芸能が神社の祭礼の中で行われていることがわかる。

台湾神社以外にも、台南・台中・高雄市などでも日本の神社が建てられ、そこで祭りが行われていることが見出せる。記事の密度も異なるが、ここでは一例として新竹神社の祭典に関する『台湾日日新報』（昭和九年（一九三四）一〇月二八日）の記事を挙げておく。

二十七日夜の御旅所前舞台では六時より、舞踊、手踊り、唄、浪花節、芝居などで市民総出の如き景気をもせていた、また本島人方面では（中略）奉納の人形芝居、御旅所前では同日三時より素人演芸を出すなど街内至る所お祭り気分でざわめいていた。

たいへんな賑わいの様子が分かるとともに、浪花節がその他の様々な芸能、演芸に交じって行われていたことが見て取れる。この記事では台湾本島人の参加が確認できるが、台湾神社でも台北市の街の多くの部分を巻き込み、演者として台湾本島人が参加している様子が窺える。祭りの行列の様子を見ると、着飾って歩く練り物や、余興として台湾の芸妓芝居や台湾の芝居が披露されたこともわかる。もともと他の記事では、台湾と日本の演し

物とは別々な形で行われており、同じ祭りの中で、台湾の演し物の多くは台湾本島人の演者、その聴衆はほぼすべて台湾の人々であったと指摘されている。祭りという一つの賑わいの中にも、このように参加者が分けられていた部分があったことは、留意する必要があるだろう。

### 三、タカマチ興行と博覧会

台湾のタカマチ興行については、上記のような数日間に渡って開催される神社の規模よりも長い期間で、かつ、より広い場所で興行が可能だった形がある。それが博覧会である。博覧会は、近代以降に始まった催しで、その基本的な方針は、博覧会の主催者である日本の立場でいえば、産業・工業を通じた近代化や帝国主義のアピールの場であったと言えるだろう。台湾の博覧会について述べる前に、日本が開催した博覧会にもごく簡単に触れておきたい。

日本国内で博覧会が開催されたのは、明治四年（一八七二）の京都博覧会が初めてで、内容は主に物産展と産業振興であった。しかし、翌年の明治五年（一八七二）に開催された同じ名称の第一回京都博覧会では、今や日本の伝統文化のステレオタイプの一つとして認識されている芸妓の踊り、「都をどり」が余興として登場する。芸妓の踊りは、その後も博覧会の中に受け継がれ、日本の博覧会で余興の中心的な演し物であり続ける。ちなみに同じような女性の舞台芸術として、宝塚少女歌劇も、やはり婚礼博覧会の余興として扱われていた。その後、明治後期以降、大規模な博覧会がほとんど開催され、芸能・音楽だけではなく、サーカス、あるいは水族館といった、いわゆる見世物に近いものも登場するようになる。展示の見せ方が変化し、物産の展示から、娯楽・祝祭的な要素が強くなる。明治期の博覧会は比較的国内向けの産業振興の場として開催されてはいるものの、たとえば

明治三六年（一九〇三）に開催された第五回の内国勸業博覧会では、ロシアの馬乗りサーカス（曲馬）の一団や、中国の芝居、ウォーターズライダーのアトラクションといった見世物が出てくるようになる。なお、日本の博覧会については、『日本の博覧会』（橋爪 二〇〇五）が詳しい。

博覧会において当初はあくまで付け足しに過ぎなかった余興だが、できるだけ多くの人を集めることが博覧会の成功の一つの指標にもなってきた状況を受けて、規模や中身も変化し、博覧会の集客として大きな役割を担う存在になった。そうした変化のなかでも、常に政治的な意味合いが求められた博覧会は、日本だけでなく、当時植民地となっていた台湾、朝鮮、あるいは満洲という地域でも開催されることになる（山路 二〇〇八）。

名称	開催地	開催時期
朝鮮物産共進会	京城	1915年
台湾勸業共進会	台北	1916年
大連勸業博覧会	大連	1925年
朝鮮博覧会	京城	1929年
満州大博覧会	大連	1933年
台湾博覧会	台北	1935年

表1 外地（東アジア地域）における主な博覧会

名称	開催地	開催時期
台湾勸業共進会	台北	1916年
中部勸業共進会	台中	1926年
高雄港勢博覧会	高雄	1931年
台湾博覧会	台北	1935年

表2 日本統治下の台湾における主な博覧会

日本統治下で開催された博覧会に目をむけると、東アジアおよび台湾で開催された主な博覧会は下記（表1、2）のとおりである。ここでは特に台湾で開催された博覧会のうち、「台湾勸業共進会」と、最後の「台湾博覧会」に絞って見ていきたい。タカマチの興行は、資料として残りにくいが、博覧会については比較的残っている。博覧会を開催した主催者が報告書を作っており、そこに詳細な内容が記載されている（臺灣勸業共進會協賛會 一九一六、林恵玉 二〇一二）。

まず、台湾勸業共進会に目を向けてみたい。開

催期間は、大正五年（一九一六）年の四月から五月までの約一ヶ月である。開催地は台北で、日本統治二十周年を記念して開催された。二つの会場があり、第一会場には台湾の生産品と、日本各地の様々な分野のものを出品展示した。そして第二会場にもいくつかの展示館・施設が設けられ、そのうちの一つに、芸能に関わるものとして演芸館が建てられた。共進会で具体的にどのような演芸や音楽として何が行われたかは、報告書に「余興」としてまとめられており、奏楽（西洋音楽の演奏）、そして中国の音楽が演奏されたことが記載されている。またその他に花火、福引や臨時の催し物が行われたとある。演芸館での芸能としては台北検番による芸妓の手踊り（ただし、これは日本からやってきた芸妓ではなく、台北の芸妓のグループ）が披露された。それから支那劇、そして連鎖劇は、二つのグループが合同で公演している。また名前は記載されていないが、家庭劇及びお伽劇も合同で開催されている。さらに松旭齋天勝の奇術も確認できる。以上の五つが、開催期間中に上演期間を区切って交代で披露された。

上演の様子についても記載されており、芸妓はこれまで他の場所でいろいろ披露されていたため、あまり人気がなかったとあるが、その他の演し物に関しては、満員で賑わったと記されている。なかでも天勝の奇術は非常に人気があったため、予定の日数を伸ばして上演が行われたことが記されている。すなわち、「主として本島人観覧者のために計画せらるるものなれば、本島人はもちろん、内地人にも適する天勝一座を継続興行することに決し」、公演日数を伸ばした。

天勝一座の人気の理由は、この一座がこれまでどのように興行していたかということが関係している。実は天勝は台湾にたびたび訪れていた。天勝は師匠にあたる天一とともに台湾に訪れており、さらに天勝が座長公演として訪れたものだけを抽出しても、明治四二年（一九〇九）から昭和一三年（一九三八）の間に台湾に一四回訪

れている。博覧会の前後は、明治四四年（一九一〇）、大正二年（一九一三）、大正五年（一九一六）、大正一〇年（一九二一）年に台湾を訪問し、それぞれ平均して滞在期間が約一か月あり（簡秀易 二〇一七）、共進会が開催される前からかなり人気があったことは想像がつく。また共進会の事務局のメンバーには、台湾において興行師として広く活動していた高松豊次郎が天勝の引受人にもなっている。共進会での天勝の人気も自然な流れであった。

では続いて台湾博覧会をみてみよう。台湾博覧会は植民地化に伴う日本政府による始政四十周年を記念して、昭和一〇年（一九三五）一〇月一〇日から一月二八日まで、五〇日間にわたって台北市で行われた。この博覧会が独自に発表していた「台湾の博覧会ニュース」では、五〇日間のうち、四六日目までの入場者が二四四万人と非常に賑わっており、大変成功だったと記されている。博覧会の規模もそれまでと比べてもかなり大きく、主要な施設だけでも四〇の展示施設があったという。芸能・音楽に関わるものとしては、音楽堂、演芸館、子供向けの娯楽として「こどもの国」があった。演芸館は、本館と分館と二箇所で作られた。また演芸としては、この二つの建物以外の場所でも興行が設けられていた。

大衆芸能のジャンルについて、どのような芸能が参加したのかというと、演芸館の中心的な催し物としては、芸妓の踊りがやはり披露されていたが、それと入れ替わるようにして吉本興業による様々な演芸が、演芸館のメインの出し物として出されるようになっていた。ジャズ、奇術、音曲競技、高級漫才などの演し物が並んだ。高級漫才では音曲漫才で当時人気のあった浪花家市松・芳子が出演している。演芸館の夜間興行もあり、筑前琵琶、童謡、それから大衆芸能に関しては落語、漫才、曲芸、講談、そして中国の明清楽の清楽の演奏もあった。その他、日本の三曲合奏、箏曲もあった。

台湾原住民の踊り（アミ族）もここで披露されていたが、日本の演し物に関しては、台北市内のアマチュアが参加していた。童謡や児童劇では大学生、高校生も参加している。また、台北市在住の芸人が参加している。様々な人が演者としても参加していたことが、夜間興行から見える。

#### 四、台湾博覧会のタカマチ興行 ―女相撲と活動人形―

台湾博覧会では、演芸館以外の場でタカマチ的な見世物の芸能が少なからず興行されていた（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月二四日広告）。お化屋敷、奇術、曲芸、動物を使った曲芸などである（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月二三日）。博覧会会場の南門から出たところに見世物街ができ、軒を並べた見世物小屋で客を呼び込む様子が新聞にも掲載されている。新聞の広告によれば、たとえば、動物による曲芸は「お猿さん芸」として「式三番」、「カルカヤ道心」、「忠臣蔵」などが演じられ、また「吉田菊五郎」による「国宝的至芸」（水芸）が確認できる。以下ではこれらの見世物の中から二つ、「女相撲 石山興業部」と「電気応用活動人形」を取り上げたい。

女相撲は、明治以前から存在していた芸能であるが、ここで取り上げる石山興業は、明治前半に興行として女相撲を始めている。女相撲は、文字通り女性が相撲を取るという内容であるが、その他に重い物を持ち上げて力自慢を見せたり、相撲甚句や流行り唄を歌ったり、踊りも披露する。相撲以外にも様々なものを見せるのが女相撲の興行の実態であった。

博覧会における石山興業の女相撲は比較的注目を浴びていたようで、新聞にも何度か単独で登場している（『台湾日日新報』昭和一〇年（一九三五）一〇月一二、一四、二一日）。たとえば記事の一つでは、「臺博覧物中の一異

彩 女相撲来る」と特集され、相撲を取るだけではなく、歌を披露することにも触れており、新聞の挿絵にも使われている。『女相撲民俗誌』（亀井、二〇一二年）によると、女相撲の興行は、博覧会以外にも、当時日本の統治下にあった外地を巡業し、朝鮮、満洲、樺太、南洋諸島、ハワイにも出向いている。そして台湾も博覧会と別の時期に興行に来ていた。こうした状況は、先述の松旭斎天勝の奇術の巡業のあり方と類似する部分である。

「電気応用活動人形」は現在東北地方にいくつか残されている人形芝居と同系統のものである。明治半ばに東北で創始されたと言われており、当時は活動人形と呼ばれることが多かった。主に秋田、山形あたりを拠点にして数十座が明治の半ば以降から活動した。座によって活動の規模は様々であるが、そのうちの一部の座が全国的に興行活動を展開していた。『国劇要覧』（昭和七年（一九三二）の「活動人形」の項には「名のある神社の祭礼にはたいい毎年出るので、東京でも明治神宮とか靖国神社とかいふ大きな祭りには、景気の良いときには、この団体が二組も三組も出るから知つてゐる人も多いかと思ふ」と書かれており、全国的に展開していることが窺える。

先述した台湾日日新聞の広告に出ている「電気応用活動人形」は櫻武商会という興行主の吉田京楽という人物が一座の座長を務めていた。吉田京楽の素性については断片的な情報しかわからないが、東北の人形芝居の資料などを見ると、「櫻武商会」の名前が入った幟や幕が見つかっており、おそらく人形芝居の上演とともに、各地域で、他の座の興行を手配するような組織を動かしていたことが想像できる。

また吉田京楽自身もサーカス団を率いたことが分かっている。『サーカスの歴史』（阿久根）の末尾に付されたサーカスの年表中に、昭和一六年（一九四一）から二三年（一九四八）に「吉田京楽」という名前が確認でき、サーカス団として活動していたことがわかる。ただ、具体的な活動状況は不明である。活動人形自体について

は、石山興業のように、外地で台湾で巡業していたかどうかの記録は見出せていないが、活動人形自体は、満洲で行われた博覧会（「満洲大博覧会」昭和八年（一九三三）開催）にも記載があり、外地に向けた興行活動も行っていたのではないかと想像できる。

## 五、おわりに

近代における芸能興行の実態は、浪花節などの大衆芸能が寄席や演芸場を中心として大きな役割を果たしていたが、ここで取り上げてきた祭礼や博覧会といった野外での興行も少なからず役割を果たしていたことがわかる。なかでも外地の博覧会はその特徴が端的に表れていた。女相撲の興行と活動人形を通じて見出せるのは、「見世物として大変面白いものではあるけども、少し時代遅れで頹廢的なものである」という見方である。この見方は大正から昭和へと時代を下るほどより一層表われてくる。博覧会は「近代化」を前に出すことが表の看板としてあるが、そういう中で、当時としては少し時代遅れなのが博覧会の中に入り、注目され共存していたことは、「何でもアリ」の博覧会の見世物興行が拡張していく奇妙な状況として見出せる。

また「地域から最前線まで」という点にも興行の特徴が表れている。この点については特に活動人形の例に顕著である。実は活動人形を創始した人物や関係者の出身地を辿ると、秋田市などの都会ではなく鳥海山の麓から出てきて活動し始めたことがわかる。それが最終的には、地域を拡大して日本の当時の最前線にあたるようなところで開催された博覧会で興行をしている。このような活動の範囲の拡がりも、台湾博覧会での見世物興行の特徴として見出せる。

博覧会というものを、タカマチという視点で捉えると、それまでには見られなかった、より開かれたもの、拡

がりが見えてくる。それは実際どういうふうを受け止められたのだろうか。表面的には「博覧会が多くの人に歓迎されていた」という見方が可能であるが、内実は、主催者、演者、参加者にも様々な立場の人が関わり、様々な興行物が集まった博覧会という大きな場には、複数の見方（価値観）が混在していただろう。近代の芸能興行史を相対化させるという点で、博覧会は興味深い対象であるといえる。

## 参考・引用文献

- 亀井好恵 二〇二二 『女相撲民俗誌』慶友社。
- 簡秀易 二〇一七 『両地を参照してみる―初代松旭齋天勝一座の台湾及び大阪における公演について』細井尚子編 『近代日本』空間下の東アジア大衆演劇 論文集』、立教大学アジア地域研究所。
- 臺灣勸業共進會協賛會編纂 一九一六 『臺灣勸業共進會協賛會報告書』臺灣勸業共進會協賛會。
- 橋爪紳也監修 二〇〇五 『日本の博覧会…寺下勅コレクション』（別冊太陽）、平凡社。
- 林恵玉編・解説 二〇二二 『始政四十周年記念台湾博覧会協賛會誌博覧会』（復刻版近代日本博覧会資料集成 植民地博覧会 第二巻）、国書刊行会。
- 山路勝彦 二〇〇八 『近代日本の植民地博覧会』、風響社。
- 劉麟玉 二〇一八 『日本伝統音楽の越境…植民地台湾における「邦楽」の伝承』科学研究費助成事業基盤研究（C）、平成二七年度―二九年度 研究成果報告書。